

# 胡風の著述に見る魯迅とその文学(7)

—— 1957～1984年の著述より ——

後 藤 岩 奈

Lu-Xun's character and his Literature  
seen by Hu-Feng's Literary work (7)  
(1957～1984)

Iwana Goto

## 0、はじめに

現代中国の文芸理論家で詩人の胡風は、その文芸理論形成において魯迅の影響を受けているといわれている。筆者は、胡風が魯迅から具体的にどのような影響を受けたのかを明らかにしたいと思い、ここ数年、胡風の著述より、魯迅とその文学について言及された内容を検討している。

胡風は1955年の胡風批判ののち、獄中生活を送ることになるが、1957年の詩「懷念魯迅先生」のあと、1976年より、79年1月の釈放、80年9月の名誉回復を経て死去する前年の84年までに、魯迅に関する文章、および魯迅に言及した箇所のある文章を多く書いている。それらの文章は、1980年9月の正式名誉回復以降、また1985年6月の死去以降も発表、公表されてゆくことになる。

本稿では、このうち、胡風の魯迅文学に対する認識が窺える内容のものを対象として見て行くことにする。訳文中の[ ]は筆者による訳注である。

## 1、胡風の著述に見る魯迅とその文学

以下、1957年から1984年までの詩作、書簡、報告書、評論を、8節に分けて見てゆくことにする。

### 1) 「追悼魯迅先生」(「魯迅先生を追悼する」1957年)

『胡風全集』第1巻(湖北人民出版社、1999年)に『懷春室感懷 用魯迅《亥年殘秋偶作》原韻』という詩集が収められている。1958年秋に獄中の北京懷春室にて詠み、1983年冬に北京負曝齋にて回想し、改訂と注を加えたという。この中に「記往事(五)——追悼魯迅先生」がある。<sup>(1)</sup> また『胡風晚年作品集』(漓江出版社、1987年)には「懷念魯迅先生」が収められており、字句に若干の違いがある。まず後者の「懷念魯迅先生」から見てゆく。<sup>(2)</sup> 紙数の関係で、訳文のみとし、原文は省略する。

### 魯迅先生を懷念する

耻じて笑う、玲瓏の八面に能くするを、  
敢えて収む、盤錯の千端に対するを。  
園中に土有り、堪えて豆を栽える、  
朝里に入無く、官を告うもの莫し。  
一樹の蒼松、千載の勁、  
漫天の大雪、万家寒し。  
長夜に熬え難く、孤鬼を聴き、  
慢として烏金を煮、莫、干を鑄る。

一九五七年獄中にて吟ずる  
一九六六年成都にて黙して書く

一九六八年稿を紅衛兵に没収さる  
一九八〇年復た記す

次に「記往事(五)―追悼魯迅先生」と、胡風自身による注を見てゆく。<sup>(3)</sup> 訳文のみとし、原文は省略する。

往事を記す(五)―魯迅先生を追悼する

耻じて笑う、玲瓏の八面に通ずるを、  
敢えて拈む、糾結の千端に理するを。  
園中に土有り、能く豆を栽える、  
朝里に人無く、官と作るもの莫し。  
地に立つ蒼松、千載の勁、  
漫天の白雪、万家寒し。  
長夜に熬え難く、狐、鼠を聴く、  
且く烏金を煮、莫、干を鑄る。

一、当時、多くの文人(若干の、左翼を自任する作家を含む)は皆、八方美人であった。封建主義のイデオロギーと半封建半植民地のイデオロギーが絡み合って、生活の中で奇々怪々の様相を現していた。魯迅の闘争はすなわちそれらを正視し、それらを分析し、槍が交わり血を見るものであった。

二、“能く豆を栽える”は、彼がやった本来の仕事(思想工作と創作)を指しており、彼の青年作者に対する関心と育成も指している。

三、“地に立つ蒼松”は魯迅を指した形象である。

四、“官と作るもの莫し”の句は、もし本当に彼を理解している最高指導者がいなかったら、彼は“政権を握る”組織工作をすることはなかったであろうことを指している、たとえば私が“文官に扮する”ように。実際には、党の指導者は彼を理解していたようで、彼に組織工作をやらせるようなことはあり得ない。

五、“莫、干を鑄る”の句は、彼の絶体多数の文章はどれも敵に命中した“投げ槍”、“匕首”であることを指しており、後世の人に残した武器でもある。彼が作家を育成するのは、未来に替わって戦士を作るためだとい

うことも指している。

2)「致梅志」(「梅志への書簡」1965年9月9日～9月11日)

北京の獄中より妻の梅志に宛てた書簡である。『胡風全集』第9巻の梅志の「注」によると、「この手紙は胡風が1965年9月に秦城監獄から私に書いたものである。その頃、彼はすでに十年拘禁されていたが、まだ正式な判決は出ていなかった。私は1955年5月に彼と一緒に逮捕され、1961年3月に看守所を出、自由を回復した。」という。以下、この手紙の中の魯迅に言及された箇所を訳出する。<sup>(4)</sup>

私は一言魯迅の話をします、(略)、私に言わせると、魯迅を読むのは後ろを見るためではなくて、逆に前を見る力量を吸収するためです。大多数の党員文化戦士や進歩的文化人にとっては、魯迅は時代遅れであり、踏み越えられるべきで、あるいはすでに踏み越えられ、あるいはまさに踏み越えられつつあり、これは言うまでもないことです。しかし私のような人間は、魯迅を埋めてしまう資格はまだ絶対にありません。一昨年昨年と再読した時、これまで読んで分からなかった多くの箇所、これまでの理解が不足していたのではなく誤りであった多くの箇所、さらにまだ理解していない、あるいはあまり理解していない多くの箇所を発見しました。もちろん、魯迅を読むのは、決して彼から理論を得るではありません。彼自身も言っているように、彼は理論などというものはなく、有り得る幾つかの具体的な論点の類も大半は時代遅れになった、あるいはすでに常識となっています(文芸上のものを除いて)。魯迅を読むのは、彼の身に反映されている人民の深刻な苦難と神聖な悲憤を体験するためです。魯迅を読むのは、彼から、茫茫たる広野、四方無人に身を置く大きな寂寞、万鈞の水門の扉を押し付けられたその下の全身張り裂ける大きな苦痛、烈火の中で皮膚が焼け焦げ、五臓が煮え返り、死を決して敵と奮戦する大きな沈黙を体験するためです。魯迅を読むのは、彼が憂え嘆く“後天の低能児”となるのを恥じ、彼が責める“本当の心が無く、また本当の姿も無い”人となるのを恥じ、“欺

瞞の心”、“欺瞞の血”を使って廉恥を売りに出し、人血を売りに出す人となるのを恥じ、“たくさんの雪花膏を塗り、たくさんの肉を食べるが、後世の人に何も残さない”人となるのを恥じるためです。魯迅を読むのは、彼の、“投機文学者”とグルになって悪事を働くよりはむしろ赤いシャツを着て街を掃除する労働者の気概を学ぶためであり、彼の、旗印で飾り人を脅す、あるいは他人を利用して相手を倒すようなことは絶対にしない大勇者の謙遜を学ぶためであり、彼の、原則のために敢えて表面上は原則とまさに正反対の反撃法（例えば某々と闘うのは“個人的な恨みを晴らす”ためだと言う）を採用し、敗名に身を置き、裂けても顧みない戦闘者の慷慨を学ぶためです。魯迅を読むのは、敵に対して、二六時中怨霊のように執着する怨霊、毒蛇のように纏わりつく毒蛇になろうとし、人民に対して、友人に対して、愛する人に対して、“食べるのは草で、絞り出すのは乳と血である”の“牛”と“別に煩冤有り天に問うこと莫し、僅かに慈愛余り仏相親しむ”の“仏”になろうとする彼を学ぶためです。魯迅を読むのは、どんなに立派な看板を占有するのも恥じ、しかし誠心誠意、始終一貫して、大小改めず、反語を用いて、“偽装”を用いて、ないしは敢えて“仮想敵”の地位に立ち、個人の“孤軍奮戦”の形勢の下でも、いかなる雑質もない真の集団主義者になろうとする彼を学ぶためです、——毛主席の言うところの“骨は最も硬い”等等、等等。もちろん、魯迅を読むのは、彼から、苦痛の、暗黒の、汚れた、罪惡の平凡生活から、そしてまた戦闘の、光明の、しかし依然として平凡な生活から拾ってきた、あるいは精鍊した純金のような智慧の小さな粒（彼自身、彼の本を夜市の小さな露店に例えています）を吸収するためでもあります。もちろん、魯迅を読むことは、彼からどのように言語——人となるためのこの道具を運用するのかを学ぶためでもあります。どのように言語を選択し、言語を識別し、言語を組み立てるのか、極めて心をこめて言語の労働精神に向き合い、彼の言語の血肉の感覚力を学ぶ。彼の言語の鋼の針のような鋭敏さ、明鏡のような清澈さ、毒矢のような残酷さ、母親の暖かい手のような慈愛を学ぶ。彼の言語の、肉

眼では見分けるのが難しい糸遊のような軽さ、突然押し付けられた頂を覆う千鈞のような重さを学ぶ。彼の言語の、堅い氷のような冷たさ、烈火のような熱さを学ぶ……私にとって、これらは永遠に時代遅れのものではありません。さらに私は、私たちの下の世代にとっても、やはり役に立つもので、彼らの心臓を少しだけ堅くし、血液を少しだけ清浄にし、感覚を少しだけ鋭敏にすることができると思います。このようにしてこそ、さらによく真理を追求し、さらによく学習し、労働し、戦闘し、さらによくマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を消化することでしょう。そのため、言語を学ぶという点において、私は逆にあなたに魯迅を読むことを重点の一つにすることを提案します。手に持って好きな時にめくって、好きだと感じたら何度も読んでください（もちろん、好きでないものは読む必要はありません）。これはあなたには基礎があることだと私は思います。あなたは何か文章を少し書いていますが、作家などといった身分で書いたのではなく、一人の青年母親の身分で書いたのです。（略）あなたの言語は青年母親の言語で、児童と年上の母親の間の言語は少し幼稚ですが、わざと人を騙したり、わざと人を脅したり、あるいはわざと人に媚びる感覚はありません、あなたはただ単純な願望によって、あなたが血と肉をもって育てる子供たちに平凡な単純な歓びあるいは悲しみを言いたいだけで、彼らの苦難が減り、純潔さ、賢さ、強さが増えるよう希望しているのです。これはあなたが入獄するまでの、人となる歴史の中のわずかな憐れむべき素質（私にはこれに相当するものすらありません）で、もしあなた自身でさえもそれを汚し、毀すのであれば、私はそれは歴史に対する一種の罪過だと思います。世界は果てしなく大きいですが、本人でさえも好き勝手に皆殺しにする権利はありません。だから私は、あなたには言語を学ぶ基礎があると言っているのです。しかし私がこのように提案するのは、決してあなたが分不相応に作家だとかになるためではありません、いいえ、まったくこのような意味ではありません。私の言っている意味は、言語は人となる道具であり、誠実な人になろうとするのであれば、言語に対する誠実な感情が

なくてはなりません。人となるとはどういうことか。人となるとは、人と人との交流とお互いに助け合う関係で、その道具がつまり言語で、口頭のものと口頭に基づいた書面の文章です。私は最近いつも思いますが（過去にもいつも思っていました）、人は、もし他の人と話をしたあと、その人に、毛主席が言うような“言語に味無し”あるいは“もったいつけて仰々しい”、あるいは魯迅が言うような“媚態に溢れる”ように感じさせることはあり得ません。逆に偽りではない（確かに誤りはあるけれども）、綺麗な、清潔な、愉快的印象を残し、他の人に人生に対して真剣になろうとする感情を増やし、それはまた一つの功德と言わなければなりません。ましてあなたは三人の子供の母親で、分かれている時の文通と一緒にいる時の語らいがあります。母親と子供たちの少しの偽りもない思想感情の交流、これは一つの最も美しい幸福です。今回問題が起きて、そしてあなたの足手まといとなっているのは私で、あなたの息子ではありません、これはあなたにとって不幸中の感謝すべき恩恵にちがひありません。そしてあなたの子供たちは毎日前進する中で、あなたと子供たちの思想感情の交流はきっと日一日と深化してゆき、言語に対する要求も日一日と高まってゆくことでしょう。そうでなかったら、彼らのあなたに対する感情は弱まってゆくでしょう。解放前（？）にあなたがアリゲールの母親が書いた『私の息子』を読んだのを覚えています、私はあれはいい本だと信じています（惜しいことに当時私は読んでいません）。数年前、新聞紙上で、一人のキューバの母親（息子は犠牲になった）が書いた一編の短信を読みました、彼女を慰めたアリゲール〔ソビエトの女流詩人マルガリータ・アリゲール。ナチスに抵抗するバルチザンの少女ゾーヤを描いた叙事詩『ゾーヤ』（1942年）の作者。〕の、あるいはゾーヤの母親に答えたのかどうかは分からないけれど。とても短く、言うには、息子が秘密団体に参加した時、彼女はなんともそれを望まず、なんとも心配して恐れ、二番目の息子がその後について真似をすると、彼女はさらに恐れて、さらに望まなかった、けれども上の息子がとうとう犠牲になり、彼女もそれ以上二番目の息子を止める

ことができず、代わりに、革命工作に対する関心を、息子への関心と同じと考えていた。とても短くて、文章はとても素朴で、革命の言葉はまったくありません、けれど、本当に感動します！これに関して、私は小さな感触がたくさんあります、けれど、言わないことにします。要するに、私はあなたも魯迅に言語を学ぶよう提案します、あなたの神経機能が集中に向かう手助けとなるように。

### 3)「魯迅人物三弔」（「魯迅人物三弔」1976年12月24日）<sup>(5)</sup>

「弔『傷逝』中的子君」「弔『在酒楼上』的阿順」「弔『祝福』中的祥林嫂」からなり、これら魯迅の三つの作品中の女性の登場人物について、その境遇を悼み、弔う内容の詩である。紙数の関係で訳文のみとし、原文は省略する。

#### 『傷逝』中の子君を弔う

悲しみを<sup>は</sup>評<sup>り</sup>て大憾<sup>の</sup>を抒<sup>べ</sup>、  
望<sup>の</sup>みを失<sup>は</sup>いて子君を思<sup>ふ</sup>う。  
旧<sup>ふる</sup>きを棄<sup>す</sup>てて嘆<sup>なげ</sup>嘆<sup>め</sup>輕<sup>か</sup>く、  
新<sup>あらた</sup>しきを嘗<sup>こころ</sup>みて喜<sup>よろこ</sup>驚<sup>おどろ</sup>小<sup>こ</sup>さし。  
情<sup>こころ</sup>を交<sup>まじ</sup>え能<sup>よ</sup>く志<sup>こころ</sup>を立て、  
愛<sup>こころ</sup>を被<sup>おほ</sup>りて心疑<sup>こころ</sup>わず。  
業<sup>わざ</sup>を失<sup>は</sup>いて夫<sup>お</sup>、情冷<sup>こころ</sup>ややかなり、  
縁<sup>しな</sup>に隨<sup>したが</sup>いて畜<sup>ちく</sup>、愛親<sup>あいしん</sup>し。  
新官<sup>しんくわん</sup>を憎<sup>にく</sup>みて法<sup>は</sup>有<sup>あ</sup>り、  
旧女<sup>きうにょ</sup>を拒<sup>こ</sup>みて経<sup>けい</sup>無<sup>な</sup>し。  
氣壯<sup>きさう</sup>、終<sup>つ</sup>に怯<sup>おそ</sup>えを成<sup>な</sup>し、  
光明<sup>くわうめい</sup>、忽<sup>たち</sup>ち陰<sup>いん</sup>に變<sup>か</sup>ず。  
新しきに投<sup>な</sup>じて生<sup>せい</sup>に色<sup>しき</sup>有<sup>あ</sup>り、  
旧<sup>ふる</sup>きに殉<sup>しん</sup>じて死<sup>し</sup>に声<sup>こゑ</sup>無<sup>な</sup>し。  
死<sup>し</sup>する<sup>べ</sup>くして還<sup>いまだ</sup>だ死<sup>し</sup>すること無<sup>な</sup>く、  
生<sup>せい</sup>くる<sup>べ</sup>くして尚<sup>いまだ</sup>未<sup>な</sup>だ生<sup>せい</sup>きず。  
優生<sup>ゆうせい</sup>、愛<sup>あい</sup>の厚<sup>あつ</sup>きに酬<sup>むく</sup>い、  
重死<sup>じゆうし</sup>、情<sup>こころ</sup>の深<sup>ふか</sup>きに報<sup>むく</sup>ゆる。

#### 『酒楼にて』中の阿順を弔う

悲しみを<sup>は</sup>評<sup>り</sup>て大憾<sup>の</sup>を抒<sup>べ</sup>、  
阿順<sup>あじゆん</sup>、窮<sup>きゆう</sup>冤<sup>えん</sup>に殉<sup>しん</sup>ず。  
母<sup>は</sup>故<sup>こ</sup>く、生<sup>せい</sup>、愁<sup>しう</sup>苦<sup>く</sup>なり、

父衰えて、活、困難なり。  
 言い難く病痛を藏し、  
 做るに苦しく飢寒を御ぐ。  
 偽りを見て情、慍を含み、  
 誠に逢いて、願いて縁を結ぶ。  
 剪絨花は色を失い、  
 蕎麦粉は甜みを添う。  
 手、健やかにして懶ると聞きて羞しみ、  
 心、高くして討嫌を怕る。  
 伯、奸にして誤会に哀しみ、  
 夫、鄙くして謠伝に哭く。  
 憶うに苦し、親鄰の乏しきを、  
 瞞き難し、弟妹の饑るを。  
 紅花の心、也恨み、  
 白粉の臉、都慚る。  
 想うに苦し、天堂の窄きを、  
 求むるに難し、地獄の寛きを。  
 身を翻して男、力を合わせ、  
 地を覆して女、権を同じくす。  
 力を尽くして千苦を攻め、  
 権を専にして万難を克くする。  
 愁い無し真の日月、  
 困しまず、美しき江山。  
 日月、欣として代を伝え、  
 江山、壮として年を接ぐ。  
 年年真、積累し、  
 代代美しきこと循環す。

『祝福』中の祥林嫂を弔う

悲しみを評りて大憾を抒べ、  
 働きて嫂祥林を弔う。  
 夫故く、生に着無し、  
 身卑にして、活成らず。  
 農に務め、貧しくして困苦し、  
 婢と為り、賤しくして慰撫す。  
 再び嫁げども凶獸を招き、  
 重ねて来れども正神を犯す。  
 殤を悼みて人、耐えず、  
 罪を贖いて鬼、霊無し。  
 路に斃れ嚴斥に遭い、  
 家を喪いて悪評に遭う。  
 城郷、色悦無く、  
 日月、光明ならず。

色悦、心賤しきを嘲い、  
 光明、力貧しきを笑う。  
 誠心、空しくして鬼を祭り、  
 実力、枉らに人を投ず。  
 力、実にして真実を収め、  
 心、誠に至誠を獲る。  
 誠心、法網を撕き、  
 実力、権門を砕く。  
 網破れて心、衆に従い、  
 門開きて力、群に合わす。  
 群に合わせて高德を立て、  
 衆に従いて大功を成す。  
 真に酬いて男、制造し、  
 実に報いて女、耕耘す。  
 共に制して群、還願し、  
 共に耕して衆、情を遂げる。  
 深く耕して地府を翻さん、  
 大いに制して天庭を建てん。

1976年12月24日

4)「簡述収獲」(「成果を簡述する」1976年12月～1977年3月)

『胡風全集』第6巻に収められているこの文章は、「編者注」によると、「作者は1976年12月末から1977年3月まで成都郊区清江県省労働改造局医院で入院治療を受け、各項の關係資料を書いた。大竹県四川省第三監獄に戻った後、監獄当局の求めに応じて、数ヶ月かけて、長編思想報告『簡述収獲』を書き、全文で約20余万字である。現在三つの部分を整理して本巻に収めた」とのことである。<sup>(6)</sup>

このうち、最初の部分「我的職業病」では、「私の急所の一つをはっきりと認識した——職業病が非常に深刻である」という書き出しで始まり、四川省労働改造局の賀処長に指摘されたというこの点について述べている。そして「この概括的な批評は、私が新文芸を受容して以来のすべての歴史を貫いており、もちろん今日の私の現実状況まで発展した各方面も貫いている」と述べ、その「職業病」の「歴史根源」を探ろうと、自らの経歴を振り返り、分析している。<sup>(7)</sup>以下、魯迅文学と関連する箇所を見てゆく。

20年代半ばの自分について述べる。

20年代中期、『中国青年』上の蕭楚女、惲代英らの文章と、『語絲』、特に魯迅作品の影響を受け、このような偏って好み、偏って嫌う性癖はいっそう発展した。文壇の現状に対して気詰まりを感じるだけでなく、感情が投合できない人に対しては、応接のような面会でさえ耐え難かった。この時、魯迅が自ら企画出版したソ連の文学書を読んだ。『ソビエト・ロシア文芸論戦』『蘇俄文芸論戦』の中で、魯迅が説明したような、“要旨は、旧来の伝統を覆し、国民を欺く唯美派と古典派というすでに死んだブルジョア階級芸術を破棄し、現在の新しい生きた芸術を建設し始め”、“芸術すなわち生活の創造者だと自称する”、“名をプロレタリア階級革命芸術という”ものがソビエト・ロシアに現れたことを、ぼんやりと感じた。特に『十二』の中で、十月革命の大あらしの中の“猙獰な咆哮、長い溜息を吐き続ける破壊の音楽”、混乱、卑怯者の旧世界とその人民たちの悲しい鳴き声と麻痺、銃声血色と復讐の歌声の中に現れた新世界の面影を感じた。私は、それは文芸上においても、あらしによって一切の陳腐な空気を一掃された、血をともなって誕生した一つの新しい天地であることをぼんやりと感じた（この『十二』は半世紀を経て、なお私の蔵書の中から必ず探し出すことができる）。この少し前、ソ連の同伴者作家ピリニャークが中国を訪れた際に魯迅が発した感慨をすでに読んでいた。“中国は民国元年の革命以来、いわゆる文芸家は、萎れて黄ばんだ者はなく、怪我をした者もなく、もちろんさらに消滅もしておらず、苦痛と愉悦の歌もない。これはつまり、山を崩し地を崩すような新しい大波が無いからであり、また革命が無いからでもある”。これは、文芸と革命はどのようなつながりを生じさせることができるのかを私に実感させたようである。この時、北伐軍はすでに武漢に入っており、そして私の想像の中では、それは単純な軍事行動ではなく、一年あまり前の“五・三〇”運動におけるような、激しく沸きあがる群衆の怒潮と結合するものであり、必ずしも天を崩し地を崩すような大波ではないが、必ずや枯れ草をなぎ倒す大あ

らしでもある。北京では必死に、そしてまた“灰色の砂が飛んで来て私に接吻し、大風がごうごうと新曲を奏でている……”、と吟ずるのみであった。しかし自分はまず先に、これは決して内心から発する声ではないことが分かり、中身がない、甚だしきは退屈に感じられるようになった。<sup>(8)</sup>

南方の革命のあらしに対する憧憬が彼を惹きつける。北京をあとにして、故郷の湖北省蕪春県での革命運動に参加する。この頃、彼が抱いていた感情は「完全に盲目的なロマンの感情」であったという。

実際、枯れ草をなぎ倒す大あらしは、まさに湖北省の若干の地区、特に武漢を含む幾つかの省を揺り動かしたが、ただ私は暗く重々しい、無感覚の故郷の県城に落ち込み、感じなかっただけである。武漢に逃れた時、共青团を離れた私は、対岸の人となっており、見えても近寄ることができなかった。ただ魯迅の『古い調子はもう歌い終わった』『老調子已經唱完』などの雑文、『向導』上の上海労働者の起義の報道、『少年先鋒』上の文芸と関係のある文章のみに自己を託していた。<sup>(9)</sup>

続いて「反動の黒い波」が襲来し、彼の「革命に対する盲目的なロマンの感情」は消え失せてしまう。上海に逃れた胡風は、創造社の提唱するプロレタリア階級文学の文章に触れることになる。

この頃、創造社の提唱するプロレタリア階級文学の文章を読んだ。これは中国革命の現実要求の上に戦闘の呼びかけを提起したもののはずであったが、しかし勤労人民の重い苦難や痛切な願望を少しも感じさせなかった。初めて目にした大言壮語に膨れあがったそれらの抽象理論（イデオロギー、アウフヘーベン、上部構造と経済基礎など）と作者たちのプロレタリア階級の特権代表を以て自任する高慢な態度は、一種の見せびらかし、あるいはひけらかしに過ぎないことを示しており、読んだ時、共鳴することができず、二度と読

みたいとは思わなかった。二年前、魯迅がソ連文学を語った時、懇切な感想を述べ、確かにページ数は多くはないが、しかし私たちに十月革命の大あらしの息吹を感じさせ、私たちに、新旧社会生活の血火の中の、あるいは滅亡し、あるいは前進する光景、および新旧文芸上の、萎れて黄ばんだ、あるいは逃亡没落し、あるいは突進して怪我をした、あるいは新しい生命を發育する深い変化を目の当たりにさせ、それゆえ私たちに、魯迅自身の“至ることはできないが、しかし心はこれを熱望する”という“真の熱望の心”を感じさせた。魯迅が十月革命を語る文芸は、私たちに、それは彼自身を語るものであり、また中国の読者自身の革命でもあると感じさせ、そして創造社が中国革命文学を語るの、私たちに、その中国革命は私たち読者と無関係であるだけでなく、彼ら自身とも関係のない、まるで一つの外国の物語のように感じさせる。これだけではなく、それはさらに太陽社と連合して魯迅を包囲攻撃し、魯迅がその後に形容したように、魯迅を用いて彼らの“戦旗”を祭っているのである。このことは私に思わず魯迅の概括した“芝居をする虚無党”のことを考えさせ、説明できない一種の失望ないしは反感を感じさせ、彼らに対していかなる信任をも失った。自分に対する後悔と失望が結合し、文芸の自分の内在感情の中で、革旧更新の生気が生じるのを悟り、さらにまったく茫然とした。<sup>(10)</sup>

1929年秋、胡風は東京に行き、それ以後、日本のプロレタリア文学作品、文芸理論と評論、日本語訳によるマルクス・レーニン主義の原著を読むことになる。胡風は、「私はこうして革命文学の道を確かなものにした。」と述べている。<sup>(11)</sup>

胡風は「職業病の思想根源」について、さらに8点を挙げて、具体的に述べている。そのうち、魯迅文学に関連する箇所を見てみる。まず厨川白村について。

30年代以前、文芸実践に対する理解は確かにリアリズムを主としていたが、しかし、唯心

主義の雑質を含んでおり、例えば厨川白村の『苦悶の象徴』の影響である。しかし30年代以降、唯心主義を脱したが、機械的唯物主義あるいは庸俗唯物主義に抵抗せざるを得ず、…<sup>(12)</sup>

文芸実践状況を考える上で、魯迅の伝統の中から多くのものを考えることができる、として述べる。

ここでは例を一つだけ挙げる。魯迅の言った“革命の愛は大衆にある”という言葉を用いて根本精神を概括することができる。それはつまり“殺すことができて生かすことができる、憎むことができて愛することができる、憎み、愛することができて文章ができる”。彼はさらに言う。革命の作品を書こうとするのなら、まず作者が革命の人でなくてはならない、“噴水から出てくるのはすべて水で、血管から出てくるのはすべて血である”。これは見たところ唯心論の言葉のようであるが、しかし戦闘的なリアリストの最も根本的なものを提起している。<sup>(13)</sup>

毛沢東の、文芸作家と人民の関係という問題の概括。

毛主席の革命文芸路線は立場、態度、工作任務あるいは工作対象、思想改造と思想闘争（批判と自己批判）など根本原則を確立し、さらに『新民主主義論』が提起した“魯迅の方向はすなわち中華民族の新文化の方向である”のあとを継いで、さらに“眉を横たえて冷ややかに対す千夫の指、首を俯して甘んじて為る儒子の牛”を作家の座右の銘として提起し、まさに文芸作家と人民の関係というこの根本問題の中心内容を概括した。<sup>(14)</sup>

このほかに、文芸作品における思想と感情の関係について述べた箇所、胡風は次のように述べている。

文芸作者と読者は抽象的な概念の人ではなく、感情の統一体であり、文芸作品の内容の思想の是非は、感情の真偽を以て判断するも

のであると言わねばならない。思想が是で、感情が偽りである作品は、“是”の芸術となることはできず、反対に、ファジエーエフが言うように、堕落した芸術である。そして内容が仮定の、想像のもので、甚だしきはこの世にはあり得ないものであっても、もし作者の感情が本物であれば、貴重な芸術作品となり得る。魯迅の『補天』、『铸劍』がまさに正の模範であり、世界文学史上の幾つかの偉大な作品もそうである。<sup>(15)</sup>

5) 「『石頭記』交響曲」 「附録一：読『紅樓夢』随想」 (『『石頭記』交響曲』 「附録一：『紅樓夢』を読んでの随想』 1977年)

この中で胡風は、『紅樓夢』の作者曹雪芹は「まさに彼が人類歴史の“末世”と考えたこの旧社会で、彼に代わって肯定され、珍重される人たちが活路を探し当てることを渴望し、人と人の間で理にかなった幸福な生活を送る新しい社会が得られることを願っていた」と述べ、これと対比して魯迅を挙げ、魯迅の描くところの“末世”の旧社会の人物について述べている。<sup>(16)</sup>

しかし、魯迅こそがやはり、中国共産党が成立したその年、歴史によって革命に参加する権利を与えられたが、ニセ外人の“革命を許さない”哭喪棒をくらった阿Qを、彼の働いた土地に血で葬らざるを得なかった。その後、彼はまた、光明を追求しその善意で自信に満ちていた子君に理想を放棄させ、封建的な暗い家に戻り、やつれて死なせるほかなかった。甚だしきは、ずっと人生と理想への熱愛を抱き、暗黒に反抗したが、ついには生活さえ維持できなくなり、やり方を変えて売身行為で旧社会に報復しようとした魏連受に、最後に残酷でぶざまな姿で狼の叫び声を発し、悲惨な死に方をさせるよりほかなかった。<sup>(17)</sup>

6) 「就有关魯迅作品答客問」 (『魯迅作品に関して客人の問いに答える』 1981年2月) <sup>(18)</sup>

以下に全文を訳出する。

一人の師範専科学校中文系一年生の学生が、先生が魯迅先生の一文『傷逝』を講義するのを

聞いて、子君という人物の評価に対して幾つかの疑問をもち、胡風同志に教えを請うた。のちに質問を出した時の返答記録を以下のように整理した。

問：魯迅先生は『傷逝』の中で子君という人物形象を肯定しているのでしょうか。

答：魯迅先生は作品の中で子君に対して深い同情に満ちています。

問：子君は気が弱く、遅れていて、このことが彼女の愛情の悲劇を引き起こしたと言う人がいますが、そうでしょうか。

答：違います。子君は当時、封建的な家庭の妨害を突き破ることができ、毅然として家庭を出て涓生と結ばれ、まさに新しい女性、新しい思想を体現しており、魯迅先生の賛美し同情する人物でもあります。その後涓生が失業したために、生活の貧困で彼女は生存のために奮闘せざるを得なくなりますが、しかし彼女は始終自分の純真な愛情に忠実です。彼らの愛情の悲劇を引き起こした原因は、社会の暗黒、制度の腐敗にあるとしなければなりません。魯迅は子君の結末に同情し惜しんでいます。

問：作者の筆の描くところの涓生という人物形象をどのように分析すべきでしょうか。涓生は子君に比べると強者であると言う人がいますが、そうでしょうか。

答：魯迅先生は涓生に批判の態度をもっています。涓生は子君と愛情を生じてから結ばれるまで、その態度は子君のように強くありません。彼らの生活が苦しくて耐えられない時、涓生は子君と共に生活の重荷を担う勇気もなく、彼はこれは暗黒の旧社会に造られているものであることを見ておらず、そして子君を恨み、子君を棄て、これはまさに彼の利己的な一面を表現しています。文中に涓生の懺悔の気持ちがかかれていますが、子君の死は彼に責任があるのだということを説明しています。ここから彼が追求したのは個人の幸福に過ぎないということが分かります。これはまさに作者の彼に対する批判です。

(質問者：私が上述の問題を提起するのは、先生の講義を聞いたあと、私に残った印象は、涓生という形象は肯定されるもので、子君はむしろ否定されるもので、実現不可能な個性解放



を単純に追求する具体的な悲劇の人物に過ぎない、というものです。原作を読んだあと、この分析はあまり適当でなく感じ、そのため一世代上の作家の中から魯迅先生の作品の中でこの二つの人物形象が描かれた確かな意義を探索したいと思いました。)

問：魯迅の小説の中では、まだ革命の指導を受けた新しい知識分子が描き出されていないと言う人がいますが、彼が描く知識分子は、ただ彼らの生活を書くだけで、彼らの活路をはっきりと指し示すことができておらず、これは民主主義思想の制約を受けた結果でしょうか。

答：文学芸術は生活を源とするものです。当時魯迅が生活の中で目にして、接触したのはつまり彼の小説の中で書かれた、あのようなタイプの知識分子であり、彼は実際の生活から離れて何の根拠もなく、あるいは主観的に想像して人物形象を捏造することができのでしょうか。魯迅は偉大なリアリズム作家であり、リアリズムに反して現実には存在しない人物を高く持ち上げることはできません。

問：魯迅の前期の主導思想は進化論思想ですか。二七年よりあとに共産主義者になったのでしょうか。

答：魯迅の前期の思想の中には、共産主義の思想の萌芽があり、その頃魯迅はすでに他の人を超越して、社会、人や事を深く解剖分析していました。その作品の思想の深さ、社会範囲の広さはすでに他の人の及ぶところではありません。魯迅の前期の主導思想は進化論だと言うのは妥当ではありません。

問：魯迅の小説が農民を描写する時、彼らの麻痺した、無知蒙昧を多く表現し過ぎていますが、これは彼の小説の中の主要な人物の性格です。この問題をどのように御覧になりますか。

答：魯迅の小説の中の農民の形象はいずれも现实生活の中の反映であり、例えば『阿Q正伝』の中の阿Qの精神勝利法、麻痺、無知な生態に対する風刺の意味のある描写は、まさに当時の広範な農民の思想状態を如実に反映しています、しかし作者がこの典型的な形象を描写したのは、広範な人民の覚醒を呼び覚ますためであり、決して冷酷な嘲りや風刺ではありません。

その後さらに彼に三十年代の二つのスローガ

ン論争に関する問題を質問した。彼が答えて言うには、この問題はとても大きく、すぐにははっきりと言えない、同時に中央はどうも安定團結のために、皆にしばらくこの問題の言及しないようにしているようなので、私は中央に従うことにする、だからあなたの問いには答えない、とのことであった。

一九八一年二月春後

附記：この記録は胡風同志自身の添削を経ず、胡風同志は病中のため、私たちは彼が過去にしばしばこの種の問題に言及した資料に基づいて照合整理を行うことしかできなかった。もし妥当でないところがあれば、整理者が責任を負うものである。

梅志

7)「『写在「墳」的後面』引起的感想」(「『墳』の後に記す」から引き出された感想」1982年8月28日)<sup>(19)</sup>

以下に内容を引用、要約する。

「魯迅の精神遺産の中から栄養を吸収することは、文化的生活をおくる中国人なら誰も全力を尽くすべきことだと言えよう。そして『墳』は、魯迅精神を認識する上で重要な地位を占めている。もしこれらの文章から学ばなければ、全面的に、深く魯迅を認識することはできず、精神の栄養を吸収するという目的を達することもできない。」

「『墳』は二つの部分の内容を含んでいる。前の四編は文言文である。書かれた時期は本世紀初め(1907年)で、彼は西洋の科学、文学と民主の思想を受容した。」「それ以下の十九編は“五四”文学革命中の1918年から大革命前の1925年末までに書かれたものである。魯迅は“五四”革命文学(社会主義のリアリズム文学)の開拓者であり、創始者である。」<sup>(20)</sup>

「現在、この後記を学習することを提起する。その意味はほかならぬ、この学習を通して、全書に対する比較的正確な、全面的な感受と理解を得ることができることである。」

「この後記を書く十一日前、魯迅はすでに『題

記』を書き出版者に送っている。その中で、彼は簡単に、しかし沈痛に彼がこの本を編集出版する心情を記している。敵に少しばかりの嫌悪を与え、同感する読者に少しばかりの欲びを与える、と。

このほかに、私自身にあつては、さらに小さな意味があり、つまりこれは生活の一部の痕跡とも言える。だから過去はすでに過ぎ去り、精神はあとを追いかけることはできないと、はっきり分かっているけれど、しかし、どうしてもそれを断ち切ることができず、糟粕を集めて、小さな新墳を造りたいと思う。一つには埋めるため、一つには名残りを惜しむためである。

何を名残り惜しみ、なぜ名残り惜しむのかに至っては、彼がまだ忘れることができない、彼が紹介した数人の詩人以外に、彼はもうそれ以上何かを言い添えようとはしなかった。

現在、後記の中で彼はもう一度沈痛に彼の心情を述べている。なぜか。それは彼はさらにいっそう闘争の深刻さに思いが至ったからである。その中でさらに何を名残り惜しむかについて言及している。もう一度“その中で紹介した数人の詩人のことは、あるいはなお一読を妨げない”と重ねて述べ、さらに最も重要な一段を補っている。

最後の“フェアプレー”を論ずる一編は、参考に供するすることができるかもしれない、というのも、確かにこれは私の血で書いたものではないが、私の同輩や私より若い青年たちの血を見て書かれたものだからである。

この幾つかの言葉の中に含まれた意義はとても重要なもので、『墳』のすべての内容に貫かれているだけでなく、魯迅のすべての精神過程を貫いているものである。

私たちの学習はここから始めよう。」<sup>(21)</sup>

一、「本世紀の初め、先進的な中国人は祖国の新生のためにどのような計画を提起したであろうか。」一つは「排満」であった。しかし「問題は、満州族を排したあと、どうするのかとい

うことであった。」魯迅は「根本問題は一つの理想を立てることであると考えていた。彼が立てる理想は“人国”を建設することであり、人が人を抑圧し、人が人を搾取することがない、人がみな平等である国家を建設することである。どのようにしたらこのような“人国”を建設することができるのか。彼は、まず最初に“人を立て”なければならない、すなわち人民の中で思想革命をおこない、先進的な、“人国”の建設を理想とする人を人民の中に出現させると考えた。」<sup>(22)</sup>

二、「しかし、この“人国”を建設する理想は、主観的な願望から出発したものである。彼が探し当てた理論根拠は、ヨーロッパブルジョア階級の唯心論哲学であり、例えばニーチェの“超人”論がそうである。」魯迅の“人を立てる”を以て“人国”建設の計画を達成することは、やはり空想的な人類解放主義であり、そのため彼はまだ客観的な歴史過程の中で根拠を探し当てることができなかった。ただロシアの十月革命を目にしてからのち、彼はこのような宏大な結論に達した。

ただ、もともとはこの熟知した本階級を憎悪し、それが潰滅するのを少しも惜しまなかったが、その後、さらに事実の教訓によって、ただ新興のプロレタリアートのみに将来があると考えようになったが、それは確かなことである。(『二心集』序言)

この“事実の教訓”の“事実”とは、何を指すのか。それは十月革命のみを指し、それ以外のものではない。十月革命というこの偉大な歴史事実は魯迅の空想的な人類解放主義の一面を覆し、歴史唯物論の人類解放主義へと転換させ、彼自身を大いに躍進させ、社会主義のリアリズムの戦士、文学家、思想家、革命家にした。」<sup>(23)</sup>

三、「彼は十月革命に対して、さらに1919年(『熱風』の『聖武』)に極めてその情熱的な態度を宣言した。」<sup>(24)</sup>

1、「何でも奪って自分のものとし、暴力統治を行い、“ただ我のみで一切の時間空間のうま酒を飲み尽くそうというこの思想界に”、外来の平等共存の思想は“実に足を踏み入れる余

地はない”。ここに真の唯物主義者の立場が宣言された。哲学上の“物”(科学上の“物”とは違う)は、二つの属性しかなく、すなわち時間性と空間性である。時間性において、いかなる物も変化中であり、運動中である。空間性において、いかなる物も他の物と関連している、条件の有る存在である。しかし、中国の伝統思想、例えば儒家思想は、時間性空間性から抽象された、硬化したものである。そのためそれは外来の思想とは相容れないものである。私は疑う、彼はここで“五四”当時のいわゆる新思想、例えば胡適思想をこの中で批判しているのかもしれない。思想革命、特に人類解放(人民解放)の思想革命は、暴力統治に対して激烈な闘争を行わなければならない]

2、「彼は揚言する。“他国を見てみよ、この‘来たぞ’に抵抗拒否するのは主義ある人民だ。彼らは信じる主義のためには、他の一切を犠牲にして、骨肉を鋒刃にぶっつけて鈍らせ、血液を火焰に注いで消し止めた。刀の火、火の色が衰え鈍るところに、一種の薄明に空の色を見出す、これが新世紀の曙光である”。これは十月革命に対する至情の歌頌である。』

3、「彼は指摘する、“曙光が頭上にあるのに、頭を上げないと、永遠に物質の閃光しか見えない”。言うまでもなく、これは反語を用いて、中国人民に十月革命というこの新世紀の精神閃光に向かって頭を上げるよう呼びかけているのである。そうでなければ、永遠に富国、強兵、実業、国会開設、立憲といった“物質”の“閃光”の中に陥るのみである。』

四、「再び私たちが学習すべき『墳』とその後記に戻る。」<sup>(25)</sup>

1、「上述したことから、前に文言文で紹介したヨーロッパの反抗詩人の闘争精神はどのような重要な意義をもっているかを見ることができ、私たちは現在、彼らから貴重な栄養を汲取ることができる。例えば、紹介者はこのような誓いの言葉を下した。“もし奴隷が前に立っていたら、きっと心から悲しみ、憎む。心から悲しむ、ゆえにその不幸を哀しむ。憎む、ゆえにその争わざるを怒る”。彼はさらにこのような闘争要求を提起した。“響くごとに必ず人心を射る”。この二つが要求するものは、作者は

必ずやその精神において、彼の書いた人物と運命を同じくし、生死を共にしなければならない、必ずや人物の悲喜愛恨を自分の内在要求と化さなければならない、内心の深い処で人物と共に生活し、共に戦闘し、人物の闘争要求をさらに強固な高度にまで高める。前の一つについて言うと、阿Qこそが幾千万もの読者を目覚めさせる形象である。後の一つについて言うと、甚だしきは彼のあの数編の短い雑感でさえも読者に鋭い感応を生じさせ、心から作者と一体となることができるのである。』

2、四編の「文言文の中で紹介されている文化思想は、それらの核心は人類解放(人民解放)の要求である。それは空想的であるが、しかし十月革命を経て、一躍して歴史唯物主義の社会主義思想へと転化し、作者本人も社会主義リアリズムの人民戦士へと前進した。』

3、「彼のこの十数編の文章の闘争目標は何か。それは、彼が歴史根拠を探し当てた人類解放思想によって、彼はさらにいっそう“この熟知した本階級を憎悪し、それが潰滅するのを少しも惜しまない”ことである。ほほどの一編にも最後まで追い詰める闘争の激情が貫かれて」

4、「『フェアプレーはまだ早い』について。「ここで論争されているのは、一つの根本的な闘争道徳の問題である。フェアプレーとは、西洋ブルジョア階級がスポーツの試合やその他の競技をおこなう際の用語である。その意味は、双方がともに公明正大で、不当な手段を用いない、というものである。イギリス紳士はこれを党派闘争、社会闘争にまで拡張しているが、しかし実際にはそれは騙りに過ぎない。思いもよらず、“五四”退潮期の1925年、進歩的文化界では、ある人(林語堂を代表とする)がこの精神を提唱し、敵に対しても平等に対処しなくてはならないと言った。人を罵ることは罵られることでもある。特に失敗した敵に対しては、“井戸に落ちた者に石を落として”、さらに攻撃を加えてはならない、それは、水に落ちた犬に対してもう打ってはならないのと同じである、等等。このような妥協投降思想に対して、魯迅はここで痛切な全面的な批判をおこなっている。敵に対しては、民族の敵であろうと階級の敵で

あろうと、公明正大に、平等に対処することはできない。なぜなら、敵は被抑圧者に対して、これまで公明正大で平等に対処することはなかったからである。」「魯迅は言う、“これ以後、態度と方法を変えなくてはならない。”どんな態度と方法か。改革者、革命者（革命的階級とその同盟者）は革命の敵に対して少しの容赦もない闘争を実行する。中国人民に“新世紀の曙光”十月革命に向かって頭を上げるよう呼びかける魯迅は、ここで言っているのは、プロレタリア階級（およびその同盟者）は革命過程において、敵に対して妥協することのない、有効な断固とした闘争を行わなければならないということである。革命の勝利の後、敵に対して妥協することのない、有効な独裁を行わなければならない。』

五、『『いまだ天才の前にあらず』は確かに短い、一つの角度から彼の遠大な、しかし的確な戦闘目標が提起されている。いわゆる天才を求める叫び声に対して、彼はするどい批判を加えている。彼は指摘する、天才は天才を成長させることができる民衆の中で生まれ育つのである。このような民衆がいなければ、天才はいない。そのさらに深い含意は、たとえ天才が現れても、圧迫を受け、必ず萎れて滅亡する。その次は天才をして滅亡せしめる力量であり、一つは復古思想であり、一つは排外思想である。』さらに「悪意の批評」である。「魯迅は当時、痛切に忠告した、むしろ何もしないで天才を待つより、天才を生み育てる土をつくる方がよい、と。」「私が思うに、読者と青年は少なくとも、人民の感情要求と自分の感受に忠実であってかわまない。彼の資格がどんなに古く、名声がどんなに高かろうと、それが良ければ良いと考え、良くなければ、良くないと考える。天才を出現させるか否か、天才の作品を読者の文章の気風に与えるか否かについては、確かに私たちは無力であるが、しかしこれは少なくとも、臆作に意気揚々と街を闊歩できないようにすることができ、それは無人の境地に入るようなものである。いまだ彼らに完全に占拠されていない空き地に、幾つかの臆作でないものが漏れ出して来るかもしれない。これもまた一つの土をつくる道と言えよう。』<sup>(26)</sup>

六、「この後記を書く時になって、彼は急に淡々とした哀愁が彼を襲うように感じ、これらの雑文を印刷発行することを少しばかり後悔した。これは彼にあってはめったにないことである。なぜか。彼は明言していない、あるいは明言しながらない。しかし後の方で彼は挙げているが、三、四年前、ある一人の青年が来て彼の本を買い、取り出して彼に手渡したお金には、まだ体温が残っていた。この体温は彼の心に焼き付き、彼の文学がこのような青年を害しはしないかと、彼はしばしば心配した。このことはこうとしか言えない、彼のこの後悔の感情は、彼がこの本で表現した思想の深刻さを彼がさらに強く意識し、その勢いは必ずや読者が彼の後について生死の闘争を行うまで影響するものでなくてはならない、と。彼が挙げたこの後悔の感情は、彼の影響を受け入れる時には、最も真剣に考慮をするよう、読者に求めるものであった。彼はほかの人のために道案内はできないと何度も声明したが、これも同様の心情から出たものである。」

「最後に、陸機の曹操を引う八句の韻文を引用して結んでいる。」

「魯迅はもちろん曹操を笑うべきと思った。しかし彼はとっさに自分を抑えることができず、この韻文を引用して彼のこの“墳”に埋められた思想に対する未練を託し、彼の強烈な未練の心情を表した。」<sup>(27)</sup>

七、「彼は再度、文言に反対して白話を主張する主張を声明せざるを得なかった。生きた人の口頭の白話であってこそ、豊富で新鮮な現代人の思想感情を反映することができる。これは“五四”文学革命の最低限の戦闘の主張であり、そして必然的に勝利を勝ち取った」。しかし反改革の勢力はしばしば白話文に反対した。「魯迅はこの中で青年に厳しく警戒するよう忠告し、さらにもう一度青年に古書をあまり読まないように、あるいはまったく読まないようにと忠告する主張を提起した。彼は繰り返し説明したが、彼のこの言葉は、多くの苦痛と引き換えの本当の言葉である。」<sup>(28)</sup>

8)『『胡風評論集』後記』（『胡風評論集』後記）1984年4月24日）

1984年3月から85年3月にかけて人民文学出版社より『胡風評論集』上・中・下冊が出版されている。このうち下冊に「後記」が収められている。約37000字からなり、自身の略歴、3冊に収められている計9部の評論集の出版当時の状況、魯迅について、胡風の関わった論争、文芸理論上の諸問題、「七月」派作家ら、などについて本編では述べられていない内容が、補う形で述べられている。<sup>(29)</sup> 以下、魯迅に言及された箇所を見てゆく。

胡風は『文芸筆談』中の『理想主義者時代の回想』の中で、新文芸の影響を受容したこと、自分が文芸工作に従事し始めたときの状況を説明しているが、「この叙述に少なからぬ誤りが含まれている」という。<sup>(30)</sup>

特に誤りだったのは、私は、魯迅と魯迅の開拓したリアリズム伝統（社会主義リアリズム伝統）の私に対する重大な、決定的な影響について、まったく言及しなかったことである。原因の一つは、国民党の審査官の注意を避けるためで、彼らは魯迅の名前を見かけると警戒し出す。もう一つの原因は、左翼内部の無原則の誤解を減らそうと思ったからである。（中略）1936年、『文芸筆談』に収める時になって、私は北京にいた時期の状況を叙述する時に、“中国新文学創作の中で、真実の、赤裸々な人生とその格闘を発見したが、それもこの時期である”というような一段の言葉を加えたが、これは魯迅の闘争の私に対する影響を指して言っているのである。この時、私は“左連”書記の職務を離れてすでに二年あまりたっていたが、しかしやはり魯迅の名前を書くのは避けた。“真実の、赤裸々な人生とその格闘を発見した”、これこそが影響を受けたと言えるのである。事実上、私は20年代初めに中学に入った時、すぐに新文芸の影響を受け、そしてそれは魯迅の影響が主であった。まず初めに『晨报』旬刊で彼の『呐喊』自序を読み、心を揺さぶられた。以後、おおよそ彼が書いたものがあれば、たとえ新聞の副刊に仮名で書かれた小雑感であっても捜し出して読み、彼が書いたものであるかどうか推測した。『語絲』が出版される

に至り、さらに毎期、彼の文章を貪り読まなくては収まらなかった。彼の人物、例えば閻土、祥林嫂、阿Q、孔乙己、子君、眉間尺……、いずれもつねに私の心の中に生きている。私はこの状況を書かなかったが、ここに当時の左翼内部の矛盾の深刻さと私自身の臆病さが分かる。記念する時、魯迅に関して、私は何度か感想を書いたが、いずれも急場を凌いだもので、私の彼に対する感情と理解を十分に表現できていなかった。<sup>(31)</sup>

魯迅と社会主義リアリズムについて述べる。

私は上で魯迅の開拓した伝統は社会主義リアリズムの伝統であることを肯定したが、これは歴史の実際にもとづくものである。早くも本世紀初めの1907年、彼は“新しい源を探索する”という要求から出発して、“人国”建設の理想を提起した。しかし彼は現実社会の中で、このような階級抑圧のない、階級搾取のない、人々がみな平等な“人国”を建設する道を探し当てることはできなかった。彼のこのような共産主義は一種の空想に過ぎなかった。彼は実践の道を探し当てることができず、苦悶の中、十年“沈思”した。1917年ロシア革命の勝利に至り、彼はようやく一歩進んで“新しい源”がどこにあるのかを発見した。彼はプロレタリア階級を発見した。『新青年』第6巻第5号（1919年5月）で、李大釗は『私のマルクス主義観』を発表した。魯迅はどうか。彼は小説『葉』を発表し、辛亥革命の失敗を痛切に暴露した。彼は雑感『聖武』を発表し、十月革命の勝利は“主義をもつ人民”が“新世紀の曙光”であることによるとはっきりと指摘し、彼は中国人民にこの“曙光”に向かって頭を上げるよう呼びかけた。魯迅と李大釗は共に中国人民革命の歴史の道を発見した。魯迅と李大釗、陳独秀らはいずれも『新青年』の編集同人であり、『新青年』の思想路線を掴んでいた。その後、魯迅はさらに“もともとはこの熟知した本階級を憎悪し、それが潰滅するのを少しも惜しまなかったが、その後、さらに事実の教訓によって、ただ新興のプロレタリアートのみに将

来があると考えた。”とはっきりと表明した。この“事実”とは、十月革命でしかなく、それ以外のものではない。十月革命によって、魯迅は空想主義の共産主義から歴史唯物主義の共産主義への転換を完成させた。その後の実践闘争の中で、発展もあり曲折もあったが、しかしこの道、この目標は確固として揺るがないものである。そうである。魯迅の筆のもとでは、決して社会主義の新人は現れていないが、しかし彼のすべての実践闘争は説明している、彼の人物と彼の人物が身を置く（生活、受難、闘争）あの半封建半植民地の社会は、ただ共産主義思想の照明のもと、プロレタリア階級の指導のもとでのみ、具体的な歴史段階を通して勝利の目標に向かって前進することができるのである。人物にいかなる改良主義の勝利の活路を与えることも、すべて虚偽であり、非リアリズムのものである。魯迅の実践は中国革命の発展過程と呼応するものである。私は魯迅の道は中国新文芸発展の道であることを肯定するが、しかし私は魯迅に関する解説評論の中で、さまざまな原因で（私自身の認識の限界のせいでもある）、充分にこの主線を出して表現していなかった。ここにこの自己批判を提起して読者の参考としなければならない。<sup>(32)</sup>

「原則は実践経験から昇格されるものである」ということの例の一つとして、魯迅『長明灯』についての自身の誤りについて述べている。

その四、私の評論紹介も不注意を免れず、誤りがある。例えば、魯迅の『常夜灯』『長明灯』の説明の中で、私は常夜灯を“不死の精神力量”として、常夜灯を吹き消そうとするあの“狂人”を本当の狂人とした。事實は正反対で、常夜灯は封建宗法勢力の反動権力を象徴するもので、“狂人”はその数千年の反動権威に反抗する人民の代表であった。私はこの重要な例（きっとその他の誤りがまだある）を捜し出し、本文中では訂正しないでこの後記の中で自己批判するが、これは一つの信念によるものである。批評者は真理を追求する勇気をもたなければならない、しか

し同時に誤りを認める勇気もなくてはならない。<sup>(33)</sup>

文学遺産継承の問題に関連して。「国際リアリズム文学、革命文学の伝統を継承するにせよ、中国旧文学の精華を継承する、五四新文学の伝統（魯迅の伝統）を継承するにせよ、いずれも文学遺産継承の問題である。おおまかに言うと、この問題に対しては主に二つの態度がある。一つは他人の引用で、生半可な理解による、理論上の盗作であり、創作上の模倣である。」と述べ、もう一つの態度として魯迅を例に挙げている。<sup>(34)</sup>

もう一つの態度はまったく異なる。やはり魯迅のこの仕事における経歴と態度で説明しよう。遥か本世紀の初め、彼は東京で雑誌『新生』を創刊したが、うまくいかず、改めて『域外小説集』を出した。それはヨーロッパ・リアリズムの文学思潮を紹介して中国文学の思想革命運動を興そうとしたのである。主客観の限界のために、彼のこの仕事は人民の思想生活において物質的な力量を形成することができなかった。しかし魯迅自身においては、戦闘の立場にしっかりと立つことになった。五四時期、彼の最初の作品は半封建半植民地の旧中国に対して決して両立することのできない宣戦の書を発した。彼自身が宣告したように、彼の最初の小説『狂人日記』はロシアのゴーゴリの影響を受けたもので、題名さえも同じである。しかし彼はまた声明し（ゴーゴリと違って、彼は民族主義革命と社会主義革命の導きを受けている）、彼の『狂人日記』は中国の歴史の実際から生み出されたものであり、ゴーゴリの『狂人日記』の内容よりもさらに深くて広い。“さらに深くて広い”、これは生活実践と創作実践から提起されたもので、読者にありのままの理解の説明を得させる。彼の一生を通して、可能であれば、彼はいつも翻訳の仕事をやろうとし、同時にほかの人に、できる、そしてやらなければならない翻訳の仕事をするよう励ました。晩年になって、彼は困難な条件のもとで、外国作品を専門に掲載する『訳文』という雑誌を創刊

し、さらにこのため闘争を引き起こした。この仕事において、魯迅は新生の力量（新しい訳者）を発見できることも希望しており、新生の力量を助けることを目標の一つにしていた。<sup>(35)</sup>

『文芸筆談』所収の『關於創作經驗』で述べられている内容に関連して、典型人物の創造の方法について、阿Qを例に挙げて述べている。

典型人物は普遍性をもつものであり、彼が表現するところの性格特徴あるいは心理特徴は、しばしば彼と同じ社会地位にいて、境遇の似通ったその他の人々の身にも見ることができる。ただ個人の特徴だけに基づいて記録されたものではないが、しかしまた、先に多くの人の特徴を収集してから創作過程（準備過程）を始めるものでもない。往々にして、甚だしきは絶対多数とも言えるが、作者が生活の中で、幾つかの、あるいはある種の特徴をもった人を発見し、惹きつけられ、彼は感情をこの人の身に傾注し、この人の様々な感情変化、様々な言行特徴に注意をはらうと、この人は彼の精神世界の中で思想内容をもった一つの形象となるのである。このモデルがあり、そして彼はこの人と同じ社会（主に同じ階級）、同じ境遇（たとえば職業、家庭、親友関係）にいる人、あるいは人々の心理状態や性格特徴などをこの形象の身に加えることで、この形象を比較的高い深度にまで到達させることができるのである。これに限らず、作者はさらにこの過程の中で得た感情要求と思想理解にもとづいて、この形象に現れるであろう幾つかの心理変化と性格特徴を想像し、そしてこの形象の身に融合する。こうして、この形象は生活から来た、そしてまた現実よりもさらに高いところに立ち、歴史動向を十分に反映でき、そしてまた血もあり肉もある典型人物となるのである。私は、傑出した作品、特に偉大な作品の中の典型人物は、その多くがこのようにして生み出されるのだと思う。ゴースキーと魯迅は、青年作家の功を急ぐ幼稚な心理を心配したために、創作過程を重点的に説明し、創作過程を引き出すモデル

発見の起点を強く説明するのが疎かになっていた。阿Qを例に挙げてみよう。魯迅の青年期の生活をよく知っている人の紹介によると、彼の家に一人の雇い人がおり、名は“阿桂”といい、彼が阿Qのモデルである。魯迅自身が私に言ったことがある。阿Qを理解するのは困難なことではない、彼は農村のルンペン・プロレタリアートで、よく働くが、生活することができず、農村から城市へと流れていた。城市でも生活の手段を探し当てることができず、こそ泥の手伝いをするよりほかなかった。僅かばかりの儲けを得て、郷村へと戻り、何とか命をつないでいると、城市で見かけた革命者の犠牲の姿に、彼が受けた残酷な搾取と抑圧の朦朧とした意識が呼び起こされ、夢を見るように革命に参加し（そうである、彼は“革命”に“参加”したのである）、また夢を見るように土豪劣紳地主と洋奴分子の連合政権に捕まり、彼は丸い輪を描かされ、彼は荷車に乗せられ、彼はまた“師匠いらす”で“二十年たってもう一人……！”と叫び、群集の中からケダモノのような“いいぞ!!!”という叫び声が上がった。そうである、阿Qにとっては、辛亥革命は失敗したのである。活路はどこにあるのか。活路はまた阿Qの境遇から探さなければならない。それでは、私たちは問う、作者魯迅は、多くの阿Qのような境遇の人物に会うことができたのであろうか。はっきりと言うことができるが、それはあり得ない。最初のモデルとしては、雇い人阿桂一人だけかもしれない。しかし作家魯迅は一つの間精神をもっており、彼は、阿Qの身に融合し得る幾人かの人々の心理変化や性格特徴を分析することができ、彼はさらに、阿Qの身に現れるであろう心理変化、異なる境遇においてどのような反応を生じ、どのような行動をとり、どのような言葉を発するか、相手の身になって想像することができる。阿Qの多くの言行は、魯迅自身の感受と想像を通して生じ、書かれたものではないのか。阿Qはよく働き、呉媽に求愛し、ニセ外人と出くわして哭喪棒で打たれ、彼は革命しようとし、彼は床に跪いて丸い輪を描き……、このすべてが魯迅自身の苦痛の体験を経て想

像されたものではないのか、半封建半植民地の旧中国に向けて発せられた痛切の訴えではないのか。特に最後のあのケダモノのような“いいぞ”という叫び声は、作者魯迅が彼自身の沈痛な、また憎悪の感情を通して耳にしたものではないのか。この精神がなくて、魯迅は阿Qから始まった、抑圧を受け、搾取を受け、痛めつけられたあの人物たちを書くことができたであろうか。この精神がなくて(もちろん“主観戦闘精神”と呼ぶことは絶対許されない)、魯迅は魯迅と成り得たであろうか。<sup>(36)</sup>

## 2. まとめ

以下、前章で見てきた文章について、気づいたこと、考えたことを述べてみることにする。

「追悼魯迅先生」「懷念魯迅先生」には魯迅が孤独に奮闘する姿が詠われている。「魯迅人物三弔」には、男女が平等に勤労するという胡風の理想のようなものも詠みこまれているようである。主観的な内容になるが、これらの詩を訳出する際、とても疲労を感じるというか、精神力を費やされる思いがした。これは当然、筆者の読解力、翻訳能力の問題(限界)と思われるが、その一方で、獄中で思考されたこれらの詩文は、その短い一文に込められる胡風の精神力が相当濃厚なものだったのではなからうか、などと推測した。

「致梅志」。獄中より獄外の妻に宛てた書簡である。当時、監獄での検閲状況はどうであったのか定かではないが、基本的にはおおよけにすることを前提としていない文章だと思われる。「言語(言葉)を学ぶこと」「人となること」として、梅志に魯迅の文章を学ぶよう提案している内容である。この文章も前述の詩文と同様に、翻訳に際してかなり精神力を費やされる思いがした。文中に込められる獄中の思いが相応に強いのだろうか、とも考えた。「魯迅を学ぶのは、～のためです」という表現が繰り返し用いられている。合計9回用いられている。感情が溢れており、比喩が豊かで、修飾語が複雑で難解ではあるが、パターンが掴めると滑らかに感じられる文章、反復するフレーズなど、むしろ胡風の詩作よりも、詩的なものを感じさせら

れる文章である。

「簡述収穫」。文芸作品の内容が「仮定の、想像のもので、甚だしきはこの世にはあり得ないものであっても、もし作者の感情が本物であれば、貴重な芸術作品となり得る」として、例として魯迅の『補天』と『鑄劍』の二作品を挙げている。

「読『紅樓夢』随想」。『彷徨』中の『孤独者』に関する胡風の叙述の中で、最も多く述べられたものである。

「就有關魯迅作品答客問」。『傷逝』の二人の登場人物の形象に関して、学生の質問に対して胡風が答える、という問答形式の記録である。涓生と子君という二人の人物形象を「肯定的人物」か「否定的人物」かと考える、あたかも二者択一のような評価は、この作品を分析する上で、あるいはこれらの形象に対する魯迅、胡風の認識を知る上で、大いに参考になると思われるが、それとは違う視点の評価もあり得よう。

「『写在「墳」的後面』引起的感想」。「魯迅の精神遺産の中から栄養を吸収することは、文化的生活をおくる中国人なら誰しも全力を尽くしてすべきことだと言えよう。そして『墳』は、魯迅精神を認識する上で重要な地位を占めている」としている。さらに、『写在「墳」的後面』中の「確かにこれは私の血で書いたものではないが、私の同輩や私より若い青年たちの血を見て書かれたものだからである」という魯迅の言葉は、「『墳』のすべての内容に貫かれているだけでなく、魯迅のすべての精神過程を貫いているものである」としている。またこの文章では、「魯迅は最初、“人国”建設を理想とするブルジョア階級の唯心論的な、空想的な人類解放思想であったが、“新世紀の曙光”すなわち十月革命を経て、歴史唯物主義の人類解放思想、すなわち社会主義思想に転換した」という主旨の表現が随所に見られる。

「『胡風評論集』後記」。「魯迅の開拓した伝統は社会主義リアリズムの伝統である」と述べているが、胡風の言う「社会主義リアリズム」とはどのようなものなのか。1934年以降ソ連で、1953年以降中国で、共産党の方針として提唱、展開された社会主義リアリズム論との兼ね合いはどのようなのか、その具体的な内容が問われてく



と思われる。胡風は彼自身の典型人物創造の方法論に基づいて、魯迅の「阿Q」という人物形象の創造過程を分析し、説明してみせている。胡風は、魯迅が阿Qという人物形象を創造する際の精神活動、内面の状態を、彼独自の文芸上の概念「主観戦闘精神」に相当すると考え、説明したいようであるが、「もちろん“主観戦闘精神”と呼ぶことは絶対許されない」という一言は、彼独自の文芸上の概念で魯迅の文学作品を解釈することを禁欲しているかのように感じられる。

本稿で取り上げた文章のほかに、1976年以降胡風が魯迅に言及した文章として、以下のものがある。題名のあとの『全集』と数字は、その文章が収められている『胡風全集』（湖北人民出版社、1999年）とその巻数である。

- ・『關於喪事情況—我所經歷的』（1976年11月16日）、『全集』6巻。
- ・『關於三十年代前期和魯迅有関的二十三条提問』（1977年10月7日）、『全集』6巻。
- ・『關於魯迅日記中有関我的情況若干具体記憶』（1978年4月19日）、『全集』6巻。
- ・『關於魯迅“轉變”論的一点意見』（1980年5月31日）、『全集』7巻。
- ・『張光人（胡風）同志談方志敏給魯迅信的情況』（魯迅研究動態）（1980年8月6日）。
- ・『關於“左連”及和魯迅關係的若干回憶』（1980年8月12日）、『全集』7巻。
- ・『魯迅書信注釈—涉及我与我有關的情況』（1980年夏）、『全集』7巻。
- ・『向朋友們、讀者們致意』（1980年11月15日）、『全集』7巻。
- ・『一点回憶』（1981年）、『全集』7巻。
- ・『若干更正和説明』（1982年6月26日）、『全集』7巻。
- ・『魯迅先生』（1984年2月）、『全集』7巻。
- ・『左連離職後在上海』（1984年夏）、『全集』7巻。

これらの中でも、死去（1985年6月8日）の前年の1984年2月に書かれた『魯迅先生』は、字数も47000字余り、『胡風全集』第7巻の頁数にして67頁からなる、胡風の魯迅に関する文章

の集大成ともいえるものである。これも機を改めて翻訳や分析を行いたいと思う。

筆者は2002年より、「胡風の著述に見る魯迅とその文学（1）～（7）」と題して、本稿を含め、計7編の文章で、魯迅文学に言及した胡風の文章を通読してきた。1編ごとに、筆者なりに気づいたこと、考えたことを述べてきたつもりであるが、毎回胡風の文章を解説するのに手いっぱい、また魯迅の文学への理解も充分でないため、今なお、胡風が魯迅から受けた影響の全体像を体系的に述べるには至っていない。敢えて二点だけ挙げるならば、すでに拙稿「（1）」で述べたことであるが、胡風は、魯迅や、自分自身、そして後進たちを、魯迅が『摩羅詩力説』で取り上げた悪魔派の詩人と重ねて考えているようにも思われる、さらに胡風は、魯迅の「熱情」「気魄」などといった、理論的に表現するのが難しい、一種の精神状態を重視しているように思われる。<sup>(37)</sup>

魯迅と胡風の関係については、2003年に黄喬生『魯迅与胡風』（河北人民出版社）が出版されている。このような研究成果を参考にしつつ、胡風は魯迅から何を得たのか、胡風にとって魯迅とは何だったのか、どのような存在だったのか、引き続き考え、筆者なりの言葉で語れるようになりたいと思う。

最後に、胡風の詩「追悼魯迅先生」「懷念魯迅先生」「魯迅人物三弔」を訳出するにあたって、県立新潟女子短期大学の語学講師張瀛先生の御協力を得た。ここに感謝の意を表する次第です。

## 【注】

- (1)『懷春室感懷』より「記往年（五）——追悼魯迅先生」『胡風全集』第1巻（湖北人民出版社、1999年）、583頁。この詩は『胡風詩全編』（浙江文芸出版社、1992年）、463～464頁にも収められている。
- (2)『懷念魯迅先生』『胡風晚年作品選』（漓江出版社、1987年）188頁。
- (3)前掲「記往年（五）——追悼魯迅先生」583頁。
- (4)『致梅志』『胡風全集』第9巻（湖北人民出版社、1999年）、406、416～419頁。
- (5)『魯迅人物三弔』『胡風全集』第1巻、630～632

- 頁。初出は1981年第7,8合期『文教資料簡報』および1981年第3期『雪蓮』。この詩は前掲『胡風全詩編』509～511頁にも収められている。
- (6) 「簡述収獲」『胡風全集』第6巻（湖北人民出版社、1999年）、601頁。
- (7) 同上、601～602頁。
- (8) 同上、602～603頁。
- (9) 同上、604頁。
- (10) 同上、604～605頁。
- (11) 同上、605～607頁。
- (12) 同上、607頁。
- (13) 同上、611頁。
- (14) 同上、611頁。
- (15) 同上、625～626頁。
- (16) 「『石頭記』交響曲」『附録——：読『紅樓夢』随想』『胡風全集』第1巻（湖北人民出版社、1999年）、351、354～356、362頁。1977年に胡風の記憶にもとづいて書かれ、1982年に梅志が整理し、最初に『文匯月刊』1984年第3期に発表された。
- (17) 同上、356頁。
- (18) 「就有閔魯迅作品答客問」『胡風全集』第7巻（湖北人民出版社、1999年）、35～37頁。初出は1981年『語文教学』第7期。その後『胡風晚年作品選』に収められる。
- (19) 「『写在“墳”的後面』引起的感想」『胡風全集』第7巻、47～56頁。この文章の初出は1983年『北京電大通讯』第2期、および1983年『人民文学』第2期。その後『胡風晚年作品選』に収められる。
- (20) 前掲『胡風全集』第7巻47頁。
- (21) 同上、48～49頁。
- (22) 同上、49頁。
- (23) 同上、49～50頁。
- (24) 同上、51頁。
- (25) 同上、52～54頁。
- (26) 同上、54～55頁。
- (27) 同上、55～56頁。
- (28) 同上、56頁。
- (29) 『胡風評論集』下冊（人民文学出版社、1985年）、371～421頁。『新時代人』第1期にも掲載。
- (30) 「『胡風評論集』後記」『胡風全集』第3巻（湖北人民出版社、1999年）、583頁。
- (31) 同上、583～585頁。
- (32) 同上、585～586頁。
- (33) 同上、592頁。
- (34) 同上、593頁。
- (35) 同上、593～594頁。
- (36) 同上、619～621頁。
- (37) 拙稿「胡風の著述に見る魯迅とその文学（1）——1926～1939年の著述より——」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第39集（同紀要委員会、2002年）、131～132頁。なお胡風の「詩人の気質」という点については、程麻「大後方の胡風およびその文学批評の主体性」阿部幸夫・編『中国現代文学を読む 四〇年代の検証』（東方書店、1994年）、79～86頁の「一、詩人の気質と魯迅の影響」でも述べられている。